

通俗伊蘇普物語

四

福岡第一師範學校
(學校圖書)

登錄 番號	第	號
	門	
英 文 學	部	
小 說	項	
目	次	
全	冊 / 內第	冊
	25626	
分類 番號	第	號
	933	

T 1A1

22

W 46

通
信
伊
蘇
普
物
語

明治六癸酉官許

渡部氏蔵梓



a 1 3 8 0 3 2 2 3 5 8 a

福岡教育大学蔵書

伊蘇普物語卷之四目録

伊蘇普物語卷之四目録

第百二十四 弓術のきく人へおまの居 (2)

第百二十五 鳶の居 (3)

第百二十六 児童と蠅の居 (8)

第百二十七 寡婦と雌雞の居 (9)

第百二十八 園鶏と鶯の居 (18)

第百二十九 二冊の日記の居 (19)

第百四十 月と母の居 (25)

第百四十一 海路とふきの居 (33)

第一板

同 二 同 三 四 五 同

- 第百四十二 家犬と狼の話 (34)
 第百四十三 玄崎と沼澤の話 (35)
 第百四十四 病犬と麻の話 (37)
 第百四十五 海象と鰐の話 (39)
 第百四十六 騾の話 (40)
 第百四十七 板橋と林檎と覆盆子の話 (45)
 第百四十八 盲人と狼犬の話 (61)
 第百四十九 魑と魅の話 (62)
 第百五十 無尾狐の話 (68)

十二 四 四 十一 四 九 八 四

- 第百五十一 奇病と医師の話 (69)
 第百五十二 土播鼠の母と子の話 (74)
 第百五十三 馬と麻の話 (80)
 第百五十四 賢婦と羊の話 (82)
 第百五十五 犬と主人の話 (88)
 第百五十六 暴犬の話 (84)
 第百五十七 捕魚奴と若天子の話 (85)
 第百五十八 犬と噬きこ人の話 (89)
 第百五十九 猿人と楓樹の話 (90)

十二 四 四 十一 四 九 八 四

伊蘇普物語卷之四

- 第百六十 盜賊と鎧の話 (98)
- 第百六十一 鷲と矢の話 (96)
- 第百六十二 犬と秣槽の話 (97)
- 第百六十三 田舎娘と牛乳壺の話 (104)
- 第百六十四 食牛と屠丁の話 (105)
- 第百六十五 物真似師と田舎淳の話 (111)
- 第百六十六 山羊と取矢つて所羊膺の話 (113)
- 第百六十七 渾人水と敲く話 (114)

伊蘇普物語卷之四

無盡藏書齋主人譯述

第百三十四 射術の達人と獅子の話 (2)

或射術の達人が山へ獵へかゝりてふ。既に間色くするに群獸が大混雜す。夫も先主がやと駭きたる。さうして獅子が獨り奮然起て我んと立ち上る。早先主が迫來て「待て汝は示もござりや。我使を愛せしめて。弓と矢つぐ切や放せ。矢を獅子の喉後を洞きり。そを獅子が吼苦んで糞糞へ遁走んしむるを。狐が傍うゝ糸力をつけ。再び敵を向とて。

獅子が尻を振って「汝、効めたるんあ。彼人の使者をよこし殺す。此の如く。いふ。其力量が幾何より知るものぞ。たんでいふ。初めの祝儀が何心とやぞ。捕

第五回 鷹と鳩の話(3)

或は又一群の鳩にうろたへて。或は又を思ひく。只用人を。主とす。巢の傍に棲み。その鳥の末の。直に。巢の内。道。用心。堅固。あり。たれば。言へ。く。困果。を。た。る。或。日。一。計。を。出。して。き。汝。軍。の。老。兵。は。素。直。に。い。ふ。で。き。たる。よ。我。を。汝。軍。の。君。王。と。い。ふ。た。あ。う。た。ぬ。

来る。汝。軍。を。防。け。て。や。る。と。い。ふ。鳩。は。其。話。を。ま。う。と。直。に。探。し。出。し。て。い。ふ。さ。う。さ。う。さ。う。い。ふ。王。様。の。権。威。と。い。ふ。ま。う。と。毎。日。鳩。を。一。羽。づ。つ。攫。食。す。ま。う。と。生。死。を。替。へ。る。の。番。を。い。ふ。鳩。は。い。ふ。は。い。さ。ん。と。い。ふ。理。由。と。い。ふ。外。に。い。ふ。事。は。な。し。と。い。ふ。

暴君や。或は威勢を振るもの。其。我。が。已。ま。と。い。ふ。か。つ。て。あ。る。と。い。ふ。其。時。に。い。ふ。と。い。ふ。事。は。な。し。と。い。ふ。

第六回 兎と狼の話(8)

或は又。土。壁。と。い。ふ。遠。く。の。最。後。を。幾。つ。も。捕。つ。て。片。手。に。持。た。ぬ。

駭どろきとて鳥どりをどと思ひ。又是も捕とらつてすうと。掌てのひらを産うむ
しと拔ひき足あしをうとく近づかづくを。駭どろが足あしを足あしをひげて。べち坊ぼちぼち
さんサア捕とらつて下くだす。汝おきが私わがをあらうと入いりたるあり。直ただに放はなさせ
てやりせんぞ。加之かまけ又また鳥どりを産うむべし。

兵力へいりきを使もちへて力ちからものいかり。懼こむらひせぬ補

第百五十七 寡婦と雌鷄の話(9)

或寡婦一羽の雌鷄を飼かへん。毎朝卵たまごを一つ産うむ。因よて
此鷄このうは二俵ふたひらの麦あをうとす。毎日卵たまごを一つ産うむ。さうや
考かんがへて。精せい出だしく解あくをあらうとす。或經ある鷄うを産うむと矢やく肥ふく

さへなりこれど。まうう腹はらの全卵ぜんらんを産うむ。又またうとす。

外貌そとのいふも実情じつじやうとてさういふは

第百十八 閨鷄と鷄の孫(18)

二羽の牡鷄おとこが恰さと人の我われがやうと刻きく蹴け蹴けをうとす。遂ひ
は二羽ふたひらが蹴け蹴けされて負創きずはあつて鷄うの偶きは通とほる。小こさく
あつて隠かくしては舞まふ。傍そばに鷄うの屋頂やうていへ直進ちくしん飛揚ひやう
り。被翼ふしよくをうと産うむ。凱歌うたをつうりあり。其時丁度或大鷄
が翼よくを張ひて翔とる。好解こうかい食くむ。此鷄このうをたぐ
掘ほり攫とら去さひ。雲くもと遠とほうに飛とり。さうとて今いま級き

金雞納樹皮



金雞納樹皮

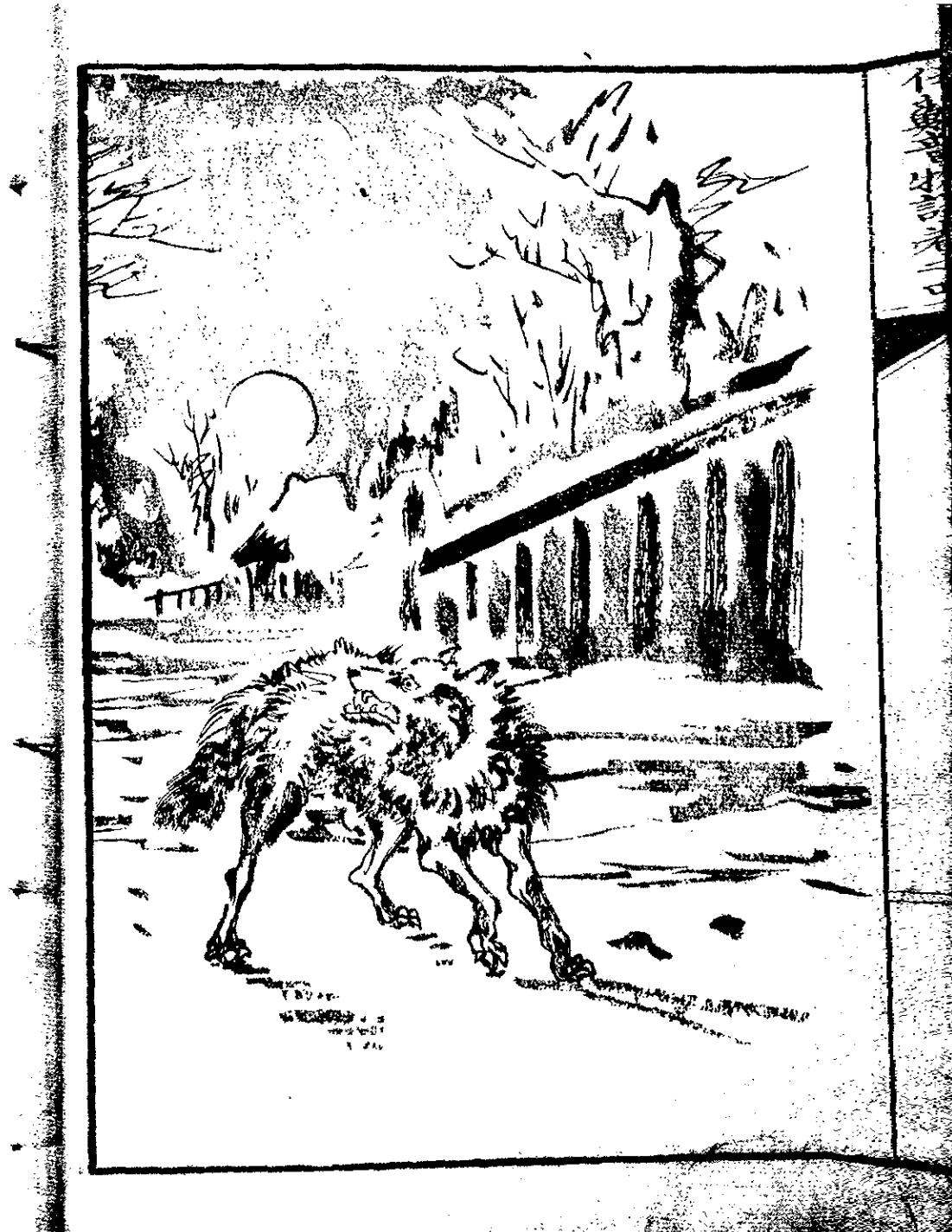
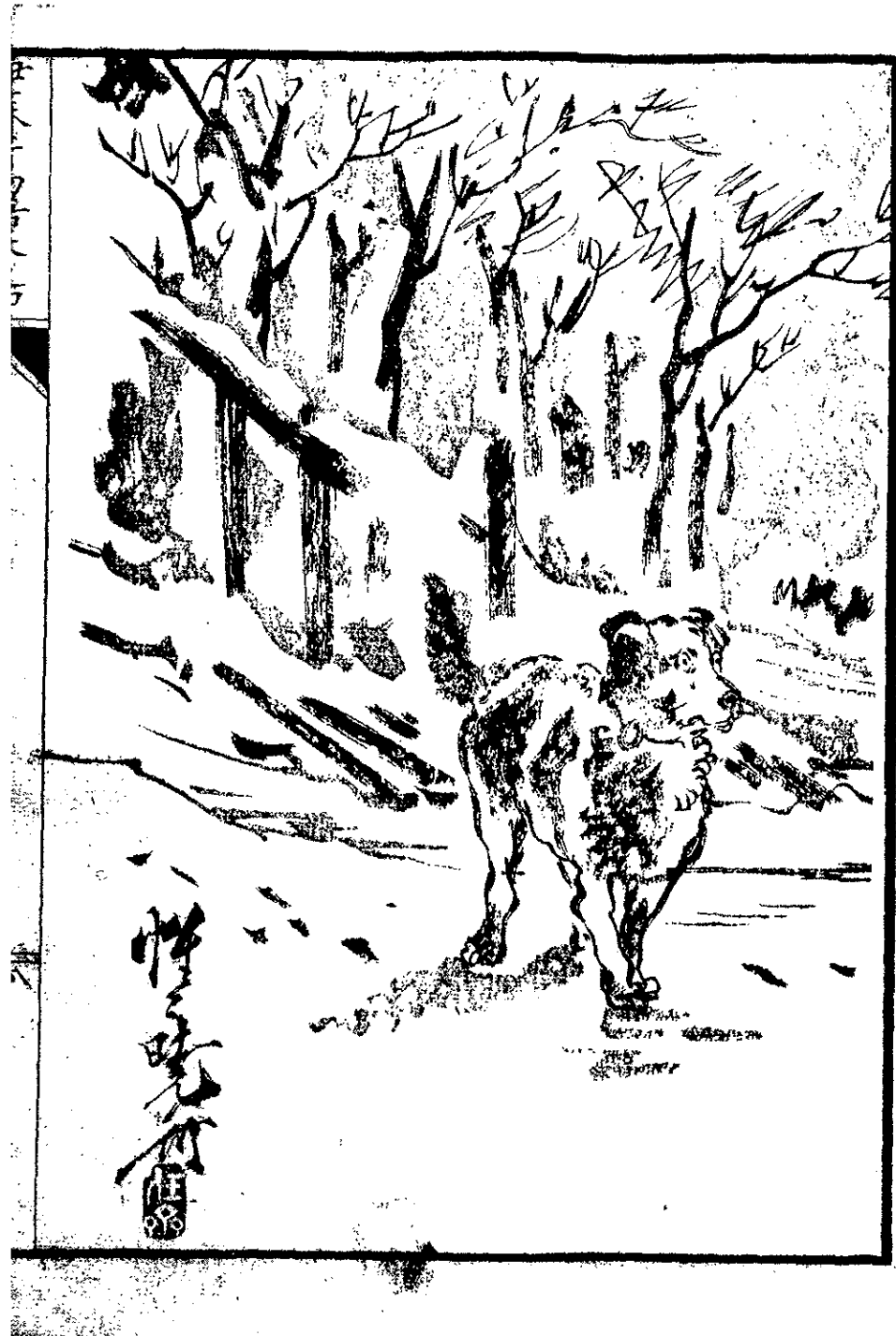


金雞納樹皮



暖^やい^や屋蓋^やがらう。多^た許^くい^い絶^ぜえ^え後^ご充^ち満^{まん}の美味^みがらう。
 い^い者^{もの}は。我^{われ}が思^{おも}ふ^ふは少^{すく}も悪^{わる}い交^{こう}易^いの^のい^いは^はし^しる^る事^{こと}。
 夫^そど^どう^う我^{われ}の睡^{すい}へ^へた^たう^う人^{ひと}を^をれ^れば^ばい^いの^のい^いと^とう^うか^か。
 思^{おも}つてお伴^{おばん}安^{やす}り^りてお内^{うち}。^かく大^{おほ}の頸^{くび}は^はつ^つけ^けて^てい^いの^のを^を贅^ち然^{ぜん}
 した^{した}出^でて。何^{なん}が^が称^{めい}友^{ゆう}ッ^て松^{まつ}る^る。^まい^いあ^あん^んで^でき^きう^うま^まん^んと
 同^{どう}う^うけ^ける^る。犬^{いぬ}「^え、果^は生^なナ^な。^べん^んも^も有^あリ^りア^アを^をい^い。^い根^ねナ^ナア^アニ^ニダ^ダガ^ガ。^どう^う
 ぞ何^{なん}が^がい^いは^はす^すう^うま^まん^ん。犬^{いぬ}「^え、^いつ^つも^もう^う手^てへ^へ物^{もの}を^を。^まふ^ふ分^{ぶん}預^よの^の付^つ
 け^け頸^{くび}環^{わん}の^のふ^ふら^らう^う。狼^{おおかみ}胆^{たん}を^をふ^ふて^て云^い。^まい^い前^{まへ}時^{とき}何^{なん}時^{とき}も^も
 何^{なん}ま^まへ^へも^も終^はる^るは^はい^いく^くあ^あど^どい^いあ^あう^うい^いあ^あま^まい^いとも^もは^はて^てお^おら

あ^あう^うと^とせ^せ。犬^{いぬ}「^え、^いつ^つも^もう^う手^てへ^へ物^{もの}を^を。^まい^い前^{まへ}時^{とき}何^{なん}時^{とき}も^も
 ぞも^も進^{すす}て^てあ^あう^う終^はる^るは^はい^いく^くあ^あど^どい^いあ^あう^うい^いあ^あま^まい^いとも^もは^はて^てお^おら
 預^よで^で羈^かる^るは^はい^いく^くあ^あど^どい^いあ^あう^うい^いあ^あま^まい^いとも^もは^はて^てお^おら
 夫^そり^りア^ア吃^く有^{ゆう}休^{きゅう}暇^{あひだ}が^があ^あう^う。馬^{うま}那^な探^{たん}の^のは^は獲^とる^るう^う少^{すく}許^く常^{じょう}と^と
 更^{さら}で^で美^み食^{しょく}を^を下^{くだ}サ^サル^ル。^まい^いく^く美^み麗^{れい}い^い侍^{さむらい}女^{にょ}も^も我^{われ}は^は浮^う山^{さん}
 食^く膳^{たん}も^もと^とま^まい^い。我^{われ}は^は根^ねお^お寵^{ちやう}犬^{いぬ}ト^トや^やぞ。^あん^んで^でま^まい^いは
 う^うと^と人^{ひと}「^え、^いつ^つも^もう^う手^てへ^へ物^{もの}を^を。^まい^い前^{まへ}時^{とき}何^{なん}時^{とき}も^も
 何^{なん}が^が欲^ほい^い。カ^カメ^メヤ^ヤ。何^{なん}ま^まへ^への^のい^いと^とう^うか^か。
 祝^{いわ}さ^さう^うせ^せう^う。根^ねお^おヤ^ヤ。夫^そり^りア^アは^は造^{ぞう}化^かお^お夜^よど^どま^ま。



雖^ガ然^ガ我^ガハ首^カ頸^カへ瑣^カで王^カ様^カの美^カ食^カはう^カう^カつ^カふ^カう^カ。ボロ^カー

麵^カ乾^カのは^カでも^カゆ^カめ^カで^カ啖^カて^カう^カ。方^カが^カ好^カ。
甘^カい^カの^カを^カ啖^カて^カ首^カ頸^カ又^カ鎖^カを^カ付^カく^カ居^カる^カう^カ。寧^カき^カ食^カふ^カ
べ^カ。天^カ性^カ自^カ由^カの^カ權^カを^カ——ふ^カう^カ思^カ方^カい^カう^カ。

ト^カ也^カ。補^カ

第百三 老婢と酒場の話 (35)

ハレルニアン——名^カ高^カき^カ酒^カ場^カの^カ東^カ入^カう^カ——酒^カ場^カが^カ。或^カ店^カは^カ。
こ^カろ^カが^カ——け^カけ^カけ^カ。既^カに^カ酒^カを^カ一^カ滴^カも^カ飲^カま^カな^カい^カ。其^カ聲^カ香^カ
四^カ方^カ又^カ教^カト^カ教^カ々^カ——う^カれ^カば^カ。外^カを^カ回^カる^カ老^カ婢^カが^カ立^カ止^カり^カ。其^カ

聲^カ香^カ又^カ極^カう^カう^カ。境^カを^カ出^カて^カ車^カへ^カ持^カ寄^カ。坊^カ一^カは^カい^カ。
啤^カ居^カう^カう^カ。余^カの^カう^カう^カ又^カ聲^カを^カき^カこ^カう^カ。甘^カ美^カ甘^カ美^カ。
き^カん^カで^カも^カ一^カ皮^カも^カ無^カ双^カ又^カ甘^カう^カう^カに^カ迷^カま^カい^カ。迷^カ香^カが^カこ^カん^カか
は^カ佳^カう^カう^カは^カ。

人^カも^カ好^カう^カ。芳^カ名^カ後^カ世^カは^カ流^カる^カれ^カば^カ生^カけ^カり^カい^カ知^カら^カま^カ
い^カぞ^カ。勉^カめ^カて^カ生^カ時^カ又^カ功^カ業^カを^カ修^カむ^カ。補^カ

第百四 病める麻の話 (37)

或^カ病^カめ^カる^カ麻^カが^カ容^カ易^カく^カ草^カの^カ喰^カつ^カ根^カを^カ思^カひ^カ。森^カの^カ傍^カの^カ根^カ
茂^カり^カたる^カ好^カ牧^カ場^カを^カ探^カむ^カ。外^カへ^カ——う^カう^カう^カう^カ。日^カは^カ好^カ朋^カ友^カ

トヤ加持ても量にまゐり。種々の代りくもを弄りあへ。
其後又らもなまふをサ一づ喰へて。やうやう
鹿も収力しと。赴きふれども。贈の量も時味まを仕舞
々ふ所。到底命も食あつた一時は。先んねありけり。然れ。

人の病業尺許も。んけく。そのハ。幸甚せむ。あゝぬ
る。トヤ(補)

第五回 海龍と鰐の活(39)

或海龍が。る。る。の。雲を。凌で。愉快を。極め。を。足。己。下。住。者
を。不足の。子。と思ひ。と。一。二。三。年。又。弄。る。の。を。た。り。あ。ふ。ふ。み。ら。ん。

今年。の。飛。切。者。と。翼。を。並。ぶ。子。も。出来。あ。んと。田。業。し。て。或。日
大。就。夢。の。向。り。此。一。儀。を。執。り。も。花。子。を。さ。ぬ。終。る。ハ。海中。の
孫。を。た。く。婦。り。や。さん。とい。ひ。たり。然。れ。ども。就。夢。之。を。知。れ。ば
し。て。夫。と。益。あ。ま。の。み。あ。り。又。あ。る。に。田。業。あり。思。ひ。止。り
終。る。と。い。ふ。も。龍。の。一。向。の。み。あ。り。ハ。龍。の。余。儀。あり。其。言。は
但。せ。て。龍。の。甲。冑。の。外。を。う。け。只。一。翼。を。弄。り。て。龍。を。弄。り。又。吊
上。げ。し。て。そこ。で。龍。が。大。お。聲。を。う。て。ソ。ラ。今。ハ。や。し。と。云。ふ。甲。冑
を。つ。つ。み。て。か。み。を。放。さ。ば。龍。の。一。言。も。き。い。ぬ。先。は。忽。ち。磨。石。の。上。へ
落。て。片。ぐ。と。碎。け。て。死。な。る。と。な。れ。

高慢^{かうまん}と墜^{おち}落^おるなり。

第五十六 驃^{馬と驃との}の話⁽⁴⁰⁾

秣^{もく}の^のけ^けひの^のふ^ふ。妹^{あね}情^{なさけ}は^は大^{おほ}く^く生^な長^{なが}る^る驃^が。或^{ある}日^ひ踊^{おど}る^る。
躑^{しり}躑^{しり}を^を掉^おて^て戯^{あそ}む^む。吾^{われ}の^の驃^が驃^が足^{あし}で^では^はつ^つさ^さけ。吾^{われ}身^み
とんと^{とんと}何^{なん}様^{やう}の^の私^{わが}善^よ且^い良^いと^とて。余^{あま}跼^はる^る跳^はる^ると^とも
トヤ^{トヤ}。驃^はは^は疲^{つか}れ^れて。や^や泥^{どろ}は^はあ^あつ^つて^ては^は奔^はる^る。そ^そを^を驃^が始^はて
考^{かん}へ^へ付^けて^て己^{おのれ}の^の驃^が母^{はは}の^の驃^が馬^{うま}で^では^はつ^つす。
考^{かん}察^{さつ}と^と毎^{まい}日^{にち}は^は二^{ふた}條^{じょう}を^を。古^{ふる}或^{ある}危^{あや}し^しき^きある^る前^{まへ}は^は先^{さき}の^の双^{ふた}
方^{かた}を^を察^{さつ}す^すが^がよ。

第五十七 柘榴^{とげろ}と林檎^{りんご}と老^おき子^この話⁽⁴⁵⁾

柘榴^{とげろ}と林檎^{りんご}と^と老^おき子^この^の話^{はな}。
柘榴^{とげろ}と林檎^{りんご}と^と美^み態^{たい}自^じ慢^{まん}と^とあ^あひ^ひく^くと^と云^い暮^くる^る。然^{しか}に^に何^{なん}と
争^{あら}ぶ^ぶ老^おき子^こと^とあ^あひ^ひく^くと^と云^い暮^くる^る。然^{しか}に^に何^{なん}と
我^{われ}軍^{ぐん}に^に永^{なが}い^いる^る争^{あら}ぶ^ぶ事^{こと}を^をは^はす。我^{われ}軍^{ぐん}に^にモ^もウ^ウ美^み態^{たい}自^じ慢^{まん}の^の
多^{おほ}き^き事^{こと}を^をは^はす。

大抵^{たいてい}不^ふ顯^{けん}者^者の方^{かた}が^が自^じ惚^ぼと^と云^いふ^ふなり。

第五十八 盲人^{めくら}と狼^{おおかみ}の^の話⁽⁶¹⁾

或^{ある}盲^{めくら}人^{ひと}が^が自^じの^の身^みの^の上^{の上}に^に我^{われ}ら^られ^れと^と活^い物^{ぶつ}を^をあ^あま^まに^に自^じ慢^{まん}と^と
云^いふ^ふ。或^{ある}時^{とき}人^{ひと}が^が其^{その}身^みの^の上^{の上}に^に狼^{おおかみ}の^の皮^{かわ}を^を載^のせ^せて^て。さ^さう^うと^と云^いふ^ふ。

犬さう狼さう知らぬ。然れ汝を羊の属さうい田やアーふい。
 悉生質ハ早くより知らりのとやゾ

第九百五
魁^{くわい}
特^{とく}
話
(62)

龍の内は胸まゝの鳩が己が眷族の多きを自負して屋上より
カ。鴉グエ、此に懸注生。其根あるを我慢するおエ。汝は雖も
多くれば多いより移り易きものなりと云ふ計は歎かへ

自由の身でない洪福と云ふは程のゆから奴隷の身よりいふ罪却より尤もな

第百廿
無尾狐之話
(68)

或狐が眾又尾を揺るもよほ時。そふ揺られぬし尾を引切て遁走いさきまう
す。あゝ世の中又かくけく尽さい。狐並ありぬ不具ある狐也。
尾があくて生々いきかゝるあり。ソナテ飛ぶ方ぐ増え考へ
し。又思ひ入して。悪い内にも求むや好なり又あらざるの
一あん思案して。昔、狐中の亭合と怪し。なんぢも我の意
ね通されされし底根を説教め。各位を私こころうらんあふ方輕
は都合よく勅行々交付あんより次第に付せぬを私も。自
分で試さるるをうらなひ受けて私又便知べんちしと思ひま



足并又往々毎々其家の什具衣類を箇く掻き
は舞ひ。夫々其家の障子もあつて。遂に眼の病も
きつて。約束の通り謝れを貰ひなさいと云ふ。老翁は眼を
さういふ言ふ振をうけられぬ。家の内へ何あつても
一紙。余儀なく謝れが滞りあつてゐる。医者の「許」も
勘弁をせぬ。なんでも拂きつてしまふと。一度は僅
促に出して来ても。老翁は一向拂分けぬ。只云「許」し
て送てゐる。医者の言はうはう。或は裁き訴へ出
す代りも無い。そのおまけ方うは出されてその始末を

おぼろにすれば。老翁「ハイ。此方の海江を通り御もお通り
せん。私の眼が又さう振をうけなう。多量にこれをば
しませう。――是より眼が見えませぬ。うう。何と
いふ様子を。それと云く約束を。――と。そこで今
彼の医者が私を治して下さる。私を治して治らぬと
思ひました。なせあれ。最初私が煩ひ彼先生は入を新ひ
す。――時分は。――家の内の法道をや。あつて眼をさ
す。――今度治つて下さる。――私の眼の家の内の
品が何一つ入らせぬ。ナント是で善機が拂われず。その

せだよ。水く糸馬はされて羈とづれろ。おれ

いつに後継うしろつぎのふれとやして。貴うやうやき不羈ふき自由りゆうの権けんをとり

くものよ物ものてい引ひ合あぬッ

第百五十四 發婦とけと綿羊ひつの話 (82)

或者あるは只一疋の綿羊ひつを捕とる發婦とけらうけが。成丈なりぢやう羊毛けを
多くとるものごとと思ひ。自分では及たつぐ毛けを洗あらう剪きるむと。
羊ひつが捕とるは地ちへうゆ。ハバ汝おきはせんあよ私わたしを憐ひどいれははみせ
あき。何れ私の血ちが毛けの目方めがたを増きしめん。そ。汝おきが私の
肉くを欲ほく思おもふあり。一思ひとひは殺ころす者もの丁ていのまへにけられ。又

毛けがけ入用いりようで洗あらうあり。血ちを出でさる剪きる剪きる丁ていへは遣はなされ。

半あま熟手じやくて練ねでいつつも拙あま酒さけを工く作さくより外ほかはみせぬ。

第百五十五 犬いぬと主人しゆじんの話 (88)

或人あるひと旅たびをなさん。新門しんもんには主しゆたる愛犬あいけんを連れて。太
聲こゑで「何なんは汝なんハ返かへせぬ。サア我われと因よりくま度ど
を。」「いふ。犬いぬが度どを捕とりて。僕わがと首くび屋や全ぜん然ぜん。旦那だんな。
ま度どをなさん。主しゆ公こうで洗あらうあり。

他ほかの世話せわをなさん。先まづの自分じぶんの装具しやうきをなさん。好よ補ほ

第百五十六 暴犬ばうけんの話 (84)



さうして捕まぬが驚お跳で来て忽ち捕獲つるや。若天
子が大なる飯をきて。猾奴。汝が建う。後氏地をらんふものや。
福住ももののが。幾人ものもの。

雲政の下より民が来懐らぬぞ。

矛盾平八犬は噬まざる人の話 (89)

或人が犬は噬まざる。誰う藤くくれものいおいたて。東西尋
あう途平。で。知し。素は。魚。返さう。其時。人か。釈切は。教えて。コッ。
汝夫を治。お。一。塊の。麵。記を。紙。に。血。の中。一。洗。く。噬。い。犬。う。
下。遣。ま。せ。く。さ。り。を。り。直。は。治。う。ぜ。と。い。ふ。く。噬。ま。さ。る。人。が。苦。笑。を。て。

「是下の、お、喰う、通う、は、ま、く、こ、さ、う。我も町中、の、大、り、
か、ま、れ、ま、く、だ、う、う。」

歌を、聞、せ、く、や、ら、う、と、ま、て、居、る、もの、の、ま、く、其、軍、は、需、用、
の、を、を、強、い、く、ゆ、せ、ぬ。

矛盾平九、旅人、と、楓、抄、の、話、(90)

夏の、酷、熱、さ、り、は、二、三、人、の、旅、人、が、西、平、の、暑、氣、は、堪、う、て、路、傍、に、
楓、抄、の、ら、い、の、を、ん、つ、け、只、一、途、は、馳、け、て、来、て、其、は、響、然、獨、を、お、う、
其、陰、は、休、ま、う、と、そ、と、各、人、横、お、ぶ、と、其、の、力、を、仰、祝、で、「ち、ん、ご、ん、
お、実、も、あ、う、ね、樹、は、人、智、の、者、の、用、を、あ、い、ふ、と、口、又、口、又、あ、う、

ふと。樹が忽ち夢を驚く。「此恩知くばぬ。汝等いなり我の
厚底を破つてゐるや。何れもな。汝等もな。乃公の事
と罵るゝかな。

恩知くばぬのその母話ななり。其婦なり。既目づ
んえぬそのでけし。

第六十 吾城と徳の話 (92)

或城が徳治の店をとり。何れ金おがなり。さうなりぬ。前
後左右尺辺まぬ。不図徳を見出し。一途まて。囁く。か
徳が怒る。さうな勢を敷く。かちさうを城まて。いぬ

我を。そんな囁く。さうなりぬ。

第六十一 吾城の運上なり。さうなりぬ。居る。補

第六十二 勢と矢の話 (96)

或弓の名人が勢を目づけて。一矢射けり。わうひ速ま
其勢は射中なり。其射勢が死ぬ。若く首を廻る。矢が已
の羽より短し。短なり。へ。何れで作。禍を遠般。劇
このあり。

第六十三 大と株槽の話 (97)

第六十四 大と株槽の話 (97)

或大が秣槽の内は臥居る時。二足^{ふたあし}の馬が秣を喰んと其
愛へ来りてゆゑ。大が是を察付くと大勢^{おほしやう}で叱罵^{しかばな}する。
二足の馬が氣を挫^{くじ}て。見^みんぶけ罰^{ばつ}なりぬ。果大が喰も
ぬくを。化^{くわ}すべし喰せぬを。

素地^{すぢ}の悪いといふ兎角^{とかく}らんあつてあつてなり。兎草^{とくそう}

おろくあつれけん。浦^{うら}

弟^{あに}子^こ三^{さん} 四^よ令^{れい}娘^{むすめ}と牛乳壺^{ぎゅうにゅう}の話^わ (104)

或四^よ令^{れい}娘^{むすめ}が改^{あらた}て牛乳壺^{ぎゅうにゅう}を裁^きてけしむ。彼^か又^{また}此^こく
算^{さん}来^きて「私^{わが}は牛乳^{ぎゅうにゅう}を煮^にて金^{かね}を夥^{おほ}の卵^{たまご}を買^かせう。さうぞと

夥^{おほ}卵^{たまご}の殻^かが二^{ふた}百^{ひゃく}より多くなり。飯^い令^{れい}生^{せい}鶏^{けい}卵^{たまご}の内^{うち}は不^ふ生^{せい}や腐^{くさ}

敗^くれぬとも。二^{ふた}百^{ひゃく}より位^{くらい}いどうとも卵^{たまご}を中^{なかつ}せう。そこで其^{その}雛^{ひな}

を飼^{かひ}立てお坊^{おふく}の高^{たか}い時^{とき}分^{ぶん}は城^{まち}中^{ちゆう}一^{いち}括^{くわつ}出^{しゅつ}て賣^うる。此^こ月^{げつ}

ふみ^{ふみ}新^{しん}裁^{さい}衣^いを着^きる。中^{なかつ}が出来^{でき}ませう。ドレ色^{いろ}を考^{かんが}へ

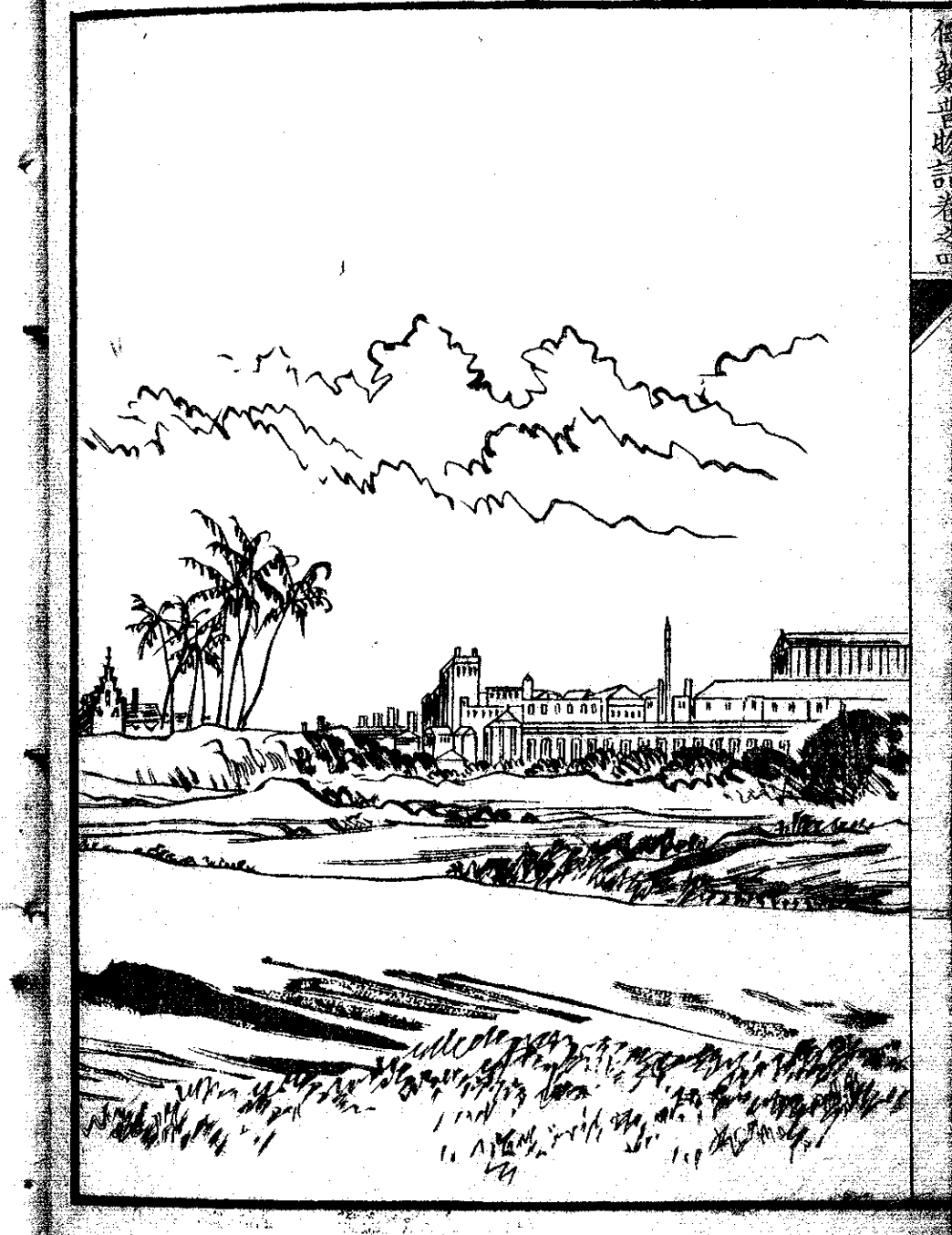
んせう。青^{あお}がよりらう。ア、さうサ。お顔^{かほ}をふくんせうと。ど。

ムかんでもあは限^{かぎ}り。さうして其^{その}新^{しん}裁^{さい}衣^いを着^きる。市^{まち}中^{ちゆう}へ

あつ。さげ少年^{しょうねん}が私^{わが}を恨^{にく}む。さうぞうらう。だが私^{わが}は其^{その}時^{とき}

各^{おの}人^{ひと}を嫌^{きら}てやりませう。慥^{たしか}にもくせりやりませうと。おろく

想像^{おぼえ}は浮^うれ。うれ。さうぞう改^{あらた}を替^かへ。牛乳^{ぎゅうにゅう}壺^はが顔^{かほ}に



向きど僣あやふされり。時より極きまく細こ示しるもむきり。後ごも
あま新あらた工夫くふうの一藝いちぎを席せきよりたて演あじても是こゝあつた。己おのれ
後ご美みを編あむらんものあり。固かたく男おとこ海うみの藝ぎ人じんども。己おのれ
けさの一技いちぎを演あじ。上うへ乗のりの纏まと頭あたまはらうんものを。我われ
されしとき金かね舎やせり。あまは友とも衆しゆも藝ぎ人じんの内うちは。昔むかし時とき
方かた名な物もの真ま似に沙さ誰たれ来きしものも加くふて新あらた奇き未いま最さいの
一藝いちぎを。某ある月つき某ある日ひは星ほしを。評ひやう判はんきりありければ。その
昔むかしの早はや相さうより。野の鳴なりの市いち中ちゆう必かならず拂はらひ。勾こう欄らん後ごに押お込こし。り。
かくて後ご幕まく開ひらき。彼かの評ひやう判はんのおまの如ごとく。席せきより上うへに。後ご

足あしより一ひとつの道みちを。持もた。傍かたわらに一人ひとりの助すけもあ。こに
かつて。人ひとハ。足あしより。思おも儀ぎ。堪たへられ。勢いきりを止とどめ。り。
其その時とき。彼かのの藝ぎ人じんハ。一面いっぺんの口くちを。演あじ。了しまふ。氣きは。さ。り。
其その後ご。い。ひ。を。う。チ。ヨ。と。首くびを。ふ。く。さ。る。内うちへ。入いる。や。り。
さ。う。す。ち。小こ豚とんの。鳴なり。を。き。り。さ。う。す。ち。人ひとが。居ゐる。
い。や。ハ。で。真まの。紐ひもが。か。の。ど。や。ッ。羽は織おりの。下したを。ま。う。て。足あしを。と。
穿せん鑿さくを。頻しばしばり。し。や。り。た。れ。ば。藝ぎ人じんハ。羽は織おりを。た。げ。懐ふところの。中うちを。改あらため。
る。け。ハ。一ひとつ。あ。う。づ。れ。ば。人ひとの。鳴なり。米こめを。あ。う。づ。れ。ば。止とどめ。り。り。
然しかう。な。ら。ば。人ひとの。群ぐん衆しゆを。押おさ。け。て。現あらわす。一ひと人ひとりの。思おもひ。を。現あらわす。

己が羊を追縋めつたりければ。羊のまゝ白くなりなつた。
欄の方へと急ぎ走りけり。かくて羊の欄の隅に走り来て。今
追来りし羊を入んと。欄内を入る。いつのまにやら山野羊
の犯たるが。殺す足雪を避けて。わたりなれば。羊の急は。思ひ振
かく我の羊より。遠くは。山野羊の。入来りし。羊を
饒倖ふ。是を此後。撫馴る。羊の。為。持来りし。
小枝。葉。あ。山羊の。底。ま。ひ。つ。今。羊。ゆ。り。羊。ど
る。心。付。け。を。り。扱。言。あ。り。て。羊。の。暖。み。あ。り
たれば。羊の。欄。の。内。を。入。る。山。羊。を。既

進去りて。山や林は。羊。一。足。り。一。足。り。一。足。り。一。足。り。
然らば。我。羊。の。あ。り。と。東。又。西。を。尋。巡。る。羊。と
き。に。地。の。あ。り。と。死。で。ら。け。る。羊。と。羊。の。山
羊。を。取。失。ひ。己。が。羊。を。死。失。さ。せ。近。所。の。羊。を。笑
ま。れ。て。後。悔。の。外。あ。り。と。我。

新。朋。友。の。あ。り。と。旧。朋。友。を。忘。る。の。あ。り。と。羊。を。失。
ふ。と。夫。が。則。ち。理。の。あ。り。と。羊。

羊。百。羊。漢。人。水。を。敵。く。話。(114)

或。降。り。魚。を。捕。ん。と。小。け。り。羊。を。獲。て。張。る。と。

其網の目へ魚をひきあへんと。長さ所々網の両方より水を汲
かる。近辺の人がかけつゝ来て甚く後をうけて。おんか
りをしてい濁水であつて飲まぬをいひ罵りつけり。漁師
は後をかくてせめてい清水のあたりに。斯くおれは段々
私に命がつけぬ。

世の中一の交際をさへくしきまゝと云ふ。自分もよく能くも
他も悪くも不可也。あまは勘弁をせぬと云ふぬテ補

伊蘇善物語卷之四終

如